

真・恋姫†無双～南北
コンビの三国志～

クーロン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔からの幼馴染、南郷仙刀と北郷一刀。現代とまるで違う三国志の世界で彼等は成長していき……そして、引つ掻き回していく。時に面白おかしく、時に激しく闘いながらすすんでいく物語！

※もともと、なろうで掲載していた小説のリメイクです。

目次

ろくでなしの幼馴染	1
乱世と修羅の国	18
もう一つの流れ星	39
白帝城にて	51
遠回り	70
馬乗り	88

ろくでなしの幼馴染

「呼オオオオオオ……」

「フー……ハ……」

聖フランチェスカ学園の武道場で、二人の少年が向かいあっていた。

既に他の人達は退出しており、武道場は二人のものになっている。

一人は剣道着を身につけ、竹刀を握っていた。身体は軽くリズムをとっている。

そして、呼吸も落ち着いている。

その対面にいる少年は対照的だった。

袴を履いているのと、体格は共通だが、それ以外はすべて異なっていた。

その少年は素手であり、しかも防具はつけていなかった。

顔は繊細な美形ではない。

むしろ逆だ。

鼻は潰れ、耳は分厚い。眼も大ぶりな造りだ。

だが、醜男と言ってしまうのは可哀そうだろう。

バランスはそれなりにとれている顔だった。

「一刀オ……行くぜ」

「よし、はい」

素手の少年は拳を固めた。

固めた拳の指は太い。関節部分が太くなっているのだ。

手の甲も丸くなっている。

長年、素手での格闘たたかを続けてきた打撃格闘家ストライイカーの手だった。

そして、潰れた耳と鼻はその少年が組技格闘家グレイプラーである特徴でもあった。

「ふしゅツツ」

少年が鋭く息を吐いた時がゴングであつたかのように、二人は動いた。

一刀と呼ばれた少年は後ろに下がり、竹刀を扱うのに最も良い距離をとった。

拳と竹刀が触れ合うか、触れ合わないか、といった間合いだ。

対して、素手の少年は、面の向こうの顔を睨みつけていた。

二人の間に無言の時間が続いた。

開幕はじまって10秒、15秒そこら経って一刀は動いた。

引き絞るように声をあげ、面を打ち込んだ。

「イエアアアアア！」

「カアツ！」

同時に素手の少年も踏み込んだ。

右手で竹刀を払い、同時に左足で一刀の右脇を狙うように蹴りを放った。

「ツ痛ウ〜」

「イッポン」

左足は見事に狙いを蹴りぬいていた。

一刀はよろけ、尻もちをついた。

「仙刀！ お前ちよつとは加減しろ！ ホントに脇が痛いんだけどー」

「えーと……確かこれで3241戦して、1435勝目……」

「聞け！ 少しぐらい聞け！」

「ヤダ。何でお前の恨み言を聞かなきゃあならねえんだよ」

「お前はさあ……」

一刀は軽く舌打ちをし、ヨロヨロと立ち上がった。

仙刀と呼ばれた少年は一刀には目もくれず、ノートに試合の結果をメモしていた。

「これで、南郷仙刀なんごうせんとう対北郷一刀ほんごうかずとの試合結果が……チツ。まだお前が勝ってんのか……。

ガキの頃の借金が痛いな」

「……まだノートに記録してたのか？」

「そりゃそうだ。忘れないためにな」

仙刀はノートを閉じ、笑いながら振り向いた。

「知ってんだろ？ 負けず嫌いなんだよ、オレ」

「そしてしつこい性格……つと」

「ウルセ。それはお前との勝ち負けに関しては、だ。で……これで8連勝。もう一戦やるか？」

仙刀は薄く笑みを浮かべ、聞いた。

だが、一刀は首を振った。

「悪いけど課題がある」

「課題イ？」

「世界史の課題で、資料館にある物に関係したことを調べて……つてやつ。提出が近いんだよ。次の月曜には出さないと」

「諦めろ。て、わけでもう一戦！」

「ふざけんなよ！ さつき聞いた意味ねえじゃん！」

「聞いて行動するか、つてのとは別よ。ベ・つ」

「……殴つてもいいか？」

「壁か床なら。もしくは天井」

「お前をだよ！ それに天井を殴れるかア！」

「あーハイハイ」

仙刀はマトモに取り合わず、適当に聞き流した。

その態度を見て、一刀は溜息を吐いた。

そして特に何を言うでもなく、するでもなく、防具を外し始めた。

それを見て仙刀も制服を取り出し、道着を脱ぎ始めた。

二人は幼馴染であったため、付き合っても長かった。

そのため、お互いの考えも大体分かっていた。

「で、やっぱ資料館に行くのか？」

「まあな。で、お前はもう一戦やりたいのか？」

「そりやあな」

「もう、地下闘技場行けよ……。東京ドーム地下6階に」

「いいなあ……。それ」

「いいのか!？」

「トーナメントとか出てえな。あと、死刑囚とやり合ったり……」

「したいの!？」

「楽しそうじゃん」

「いや! いやいやいや!」

「で、お前は何騒いでいるんだよ。資料館、閉まんぞ」

「誰のせいだと……!」

「誰だろうねえ……」

「お前だよ!」

一刀は、溜息を吐いた。

いつもの事なのか、一刀は落ち着いていた。

二人は着替え終わってから、資料館に向かった。

1

「まったく……。なんでこんなカビ臭えところに……」

「文句言うなら、帰ればいいだろうに」

「じゃあねえだろ。一人で帰るって、なんか寂しいじゃん。それに誰かに襲われそうで

……」

「お前を襲うやつはいないだろ」

「まあ、襲われたら、正当防衛として色々と……」

「何をヤル気だ!?! 一体、何をヤル気だ!?!」

「ウチで習った古武術の関節技とか、投げ技とか……。とにかく、人の体をコキヤコキヤやりたい」

「『過剰防衛』って知ってる？」

「オーウ、ワタシニホンゴ、ワ〜カリマスエ〜ン」

資料館はすでに薄暗く、人氣も無かった。

そのため、二人分の靴の音がよく響いていた。

一刀は時々足を止め、展示品を見ていたが、仙刀は興味なさげに一刀の周りをブラブラとしていた。

「仙刀……少しはこういうの、興味ないのか？ 中国の三国時代の壺とか、劍とか」

「無い。てか、大抵はそういうのは偽物だったの。なんで〇鑑定団とか見ると、分かるだろ。50万で買ったのが、5万くらいだったり……」

「いや、そうかもしれないけど。確かに偽物かもしれないけど」

「だから興味なんざねえの。あと、歴史系は嫌いなんだよ」

「それが本音だろ」

「うっせえな」

仙刀はチツ、と舌打ちをした。

そして頭をポリポリと、太い人差し指で搔いた。

ちよつとの間、お互いに無言だった。

「うーん……やっぱり、アレにするか」

一刀は今まで見ていた展示品から目を離し、身体を伸ばした。

「アレ？」

興味なさげに仙刀は聞いた。

「三国時代の鏡」

「鏡イ？ そんな物あんの？」

「あるし、日本の歴史にも……」

「黙れ歴オタ。決まったならさっさと帰ろうぜ」

そう言つて、さっさと家帰つて、ウチの柔術の練習したいしな、と仙刀は付け加えた。

「いや、実物を見て写真を撮つておく」

「んなもん、ネットで探せ」

「すぐ終わるからいいだろ。ここで撮つて、貼り付ける方がはやい」

「へーへー。なら、そこに行くか」

「ああ。確か、その角の向こうにあつたはず」

仙刀と一刀は二人で向かった。

だが、ちよつと曲がった所で誰かいることに気が付いた。

「仙刀。あれ……誰だ？」

「^{ウチ}学園の制服じゃねえな。同じ白だけど」

「……何やつてるか分かる？」

一刀は声を潜めて聞いた。

「石……？ いや、金属っぽい丸い板を持つてんな」

「多分……鏡だ」

「鏡イ？ あんなのが？」

「昔の鏡は」

仙刀はふうーんと、つまらなそうに鼻を鳴らした。

そして、二人はばれないように、ゆっくりと静かに近寄って行った。

だが、その白服は感づいたのか鏡を持って走り出した。

「……逃げた。仙刀、追って」

「何でさ。いいじゃん別に。古くさいものの一つ百個盗られようが」

「よくないから。てか、多いから。あと、お前の方が足速いんだから早く行け」

「人使い粗いねえ。まあ追うけど」

タツ、と軽く足音を立て仙刀は走り出した。

2

なんだかんだ言つて、仙刀は悪いヤツじゃない。

面倒くさがり、マイペースといった短所はあるけど……。

それでも、家が近くて親が仲良いこともあり、物心つく前から付き合いがあるから、扱い方っていうのは大体分かる。

「デメエー！ 何パクったのか見せてもらおうか！」

仙刀はすぐに追いついた。

そして、今までの走りを助走として……飛び蹴りを白服の背中に放った。

……確か、アイツって鏡を。……ってことは！

『パリーン!!』

……やっぱり。

「まだ逃げるかい？」

「仙刀！ もう、そいつは元気いっぱいじゃない！」

俺は慌てて仙刀の所に走り寄った。

その間、白服の男はピクリとも動かなかった。

「……元気いっぱいじゃないどころか」

「へんじがない、ただのしかばねのようだ」

「何でそんな余裕?! 殺ったのお前だぞ?!」

「冗談だ。生きてるよ。多分」

仙刀は白服の手首に指を置き、脈はあるといった。

それならいいけど、もう一つ問題がある。

「あとは……この鏡だ。どうすんだ、コレ。お前が弁償しないとダメだろ」

カバンを置き、しゃがんで鏡の破片をかき集める。

すでに、粉になっている部分もある。修理は無理だろうな……。

「はあ？ 折角、取り返したのにか？」

「とりかえしてねえよ！ 取り返しのつかないことになっている。ただだろうが！」

「そうだな……アロン○ルフアでくつつけるか」

「くつつかないから、コレ！ まったく、どうするんだよ……。これ、資料館で一番高価な物、とか言われていた物だし」

呟きながら破片を集めていたら、カシヤアツと無機質なシャッター音がした。

気になり振り向くと……。

「おい、仙刀。そのスマホで何をした？」

「いや、これを証拠写真にして、俺が弁償しないようにと思つて」

「最低だな、お前！ 消せ！ 今すぐに消せ！」

「げっ！ 俺の小遣いがなくなっちゃう！ 買いたい武術書があるのに！」

「買うものおかしいだろ！」

「趣味だから仕方ないだろうが！ てか、俺もう逃げるからな！」

「逃がすかあ！ 責任とれやボケ！」

「くくくツツ！ 足首掴むんじゃねえ！ 転んで鼻を打ったじゃねえか！」

「うるさい！ お前が逃げようとするからだ！」

やっぱりコイツは最低だ！

コイツの人間形成に、武道はあまり役立ってないらしい。

足首を両手で掴み、逃げられなくしても、モゾモゾと逃げようとしている。

「離せえ。俺は逃げるんだ。お前の荷物もかっぱらつてな……！」

「離すのはお前だ！ 何で俺のカバン持っているんだよ！」

「え……？ お前の財布を盗むためだけど？」

「それが何か？ ってツラすんな！」

ここまでクズだったのかコイツ！

逃げようとする仙刀。逃がさないよう握りしめる俺。

凶らずとも、一進一退の攻防になっていた。

そうこうしている内に、仙刀は抵抗をやめた。

「おい……一刀。後ろ見ろ……」

「後ろ？」

真面目なトーン、真面目な表情で仙刀が言った。

それで、後ろを見ると……。

「なんだ？ 割れた鏡が光って……」

「今だ！」

「逃がすかあ！」

「とつさの前受身！ つとお……一刀！ てめえ、危ないだろうが！ カバンの角って、

教科書とか入っていると痛いんだよ！」

「うるさい！ 罨にはめようとすんな！」

「事実だろう！ 光ってるのは事実だ！」

「そうだけど、お前は信用ならないんだよ！」

割れた鏡が勝手に光り始める、という摩訶不思議な現象が起こっているけど関係ない

！

コイツを逃がさない方が重要だ！

「チツ」

「舌打ちしやがった！ 舌打ちしやがったよコイツ！」

「せつかく逃げれるところだったのに……」

「クソ野郎だなお前は！」

俺は今度は離さないよう、仙刀の足首をしつかりと掴んだ。

仙刀はうつ伏せ状態だから、抵抗らしい抵抗は出来ていない。

また一進一退の攻防になるかと思っただけ……。

「ぬおツ!? 一刀お前の引く力、こんなに強いのか!」

そう。何故かズルズルと仙刀が一方的に引きずられているからだ。

だけど、俺が引いているんじゃない。

「違う! 鏡に……引つ張られる……!」

「え? 何? あれ、吸引力の変わらないただ一つの鏡!」

「うるせえよ! とにかく分らないけど引つ張られる……!」

何でこんなことになっているのか、訳が分からなかった。

這って鏡から離れようとしても、ピクリとも前に進まない。

力を抜いたら、一気に吸われてしまいそうだ。

「おい! その白服! 事情を説明しろ! どういうことだ!」

「……………」

「チクシヨウ! まだ気絶してやがる!」

このビチグツがあゝ! と仙刀が吼えた。

だけど、吼えたところで事態は好転しない。

何かいい方法を考えないと……。

そう思った矢先だった。

「仕方ねえ！ 一刀！ お前だけ引きづりこまれる！」

そう言つて仙刀は、腰ごと足を力ずくで回して、俺から逃げた。

コイツ……………！

「逃がすかア！」

「ああもうしつこい！ って何でお前、俺の腰に手を伸ばすんだ！」

もう手段を選んじやいられない！ コイツの力を利用して抜け出す！ もしくは道連れだ！

「いやアアアア！ この痴漢！」

「気持ち悪いこと言うな！」

「チクシヨオオ……………何度も憑りつきやがって……………ボンビーかお前は！」

必死で逃げようとする仙刀。俺も必死で逃げようと、腰にしがみ付きながらも足は踏ん張つて、吸い込まれないようにしている。

それでも、じわじわと吸われていく。

「仙刀！ もうちよつと何とかならないか!？」

「なるならなんとかしている！ いや……………」

「何かあるのか!？」

「ああ」

仙刀の背中しか目に入らない状況だけど、奴が一瞬だけ笑みを浮かべた気がした。直後、身体に電撃よりおぞましい何か走った。

「必殺！ 内股！」

「お前……俺の股間を……！」

「そして離脱！」

仙刀がしたのは相手の太もも、股間辺りを足ですくい投げる柔道技の内股だった。

狙いは股間に絞っていたのだろう。

油断していたこともあり、綺麗にやられた。

力が緩み、鏡に引っ張られる……。

「ハア……冷静になれば分かることだよな、一刀。ファンタジーやメルヘンじゃあないんだから、鏡の中なんてあるわけねえだろ。気のせい……!？」

仙刀が何か言ってるけど、よく聞こえない。

どんどん鏡に引っ張られていく。

「ああもう！ どつかの暗殺チームのスタンドみてえじゃねえか！ 仕方ねえ！」

何でか分からないけど、その一言はよく聞こえ、直後に誰かの手が伸びてきた。

「まさか二人とも引きづり込まれるとは……予想外でした」

騒いでいた二人が消え、静かになった資料館に眼鏡をかけた理知的な印象の男が現れた。

「左慈。大丈夫ですか？」

「……………」

そう言つて眼鏡の男は白服の男を起こした。

白服の男は目を覚ましたが、ボーっとしている。

「左慈？」

「あれ〜？ お兄ちゃん、ここどこ〜？」

左慈と呼ばれた男は、何かが吹つ飛んだのか、目がクリツクリになり幼児化していた。

「クハッ！」

瞬間、資料館が謎の赤い液体に染まった。

乱世と修羅の国

1

「一刀無事か!? マジで吸い込まれるなんてな……!」

「無事だけど……! 駄目だ! 戻れない!」

仙刀は一刀の手首を掴み、引き釣りだそうとしたが抵抗むなく、二人とも鏡に引きづり込まれてしまった。

鏡の中はうねうねと空間が歪み、平衡感覚が失われそうな空間だった。

その中で、浮いてるのか立っているのか、落ちているのか昇っているのか、よく分からない感覚を味わっていた。

「くっそ! こんなことになるなんなんてな……!」

「元はと言えばお前のせいだろ! 鏡割るわ、逃げようとするわ、俺を生贄にしようとするわ!」

「今は言い争う時間じゃねえ! 何とか逃げ出す方法を……!」

「確かにそうだけど……!」

「分かってくれたか! じゃあ考えてくれ!」

「いや、お前も考えろオ！」

「いや無理。この感覚、ガチで酔いそう……」

「吐くな吐くな！ 胸に顔をつけんなー！」

「やめて……ちよつと……マジで吐きそう……」

仙刀は独特の感覚に酔ったのか、一刀にもたれかかった。

一刀は本気で嫌がり、仙刀を突き放そうとした。

「頼むから吐くな！」

「オオオオオ……」

「ギヤアアアア！ って吐いてないのかよ！ まぎらわしい！」

まだ吐いてはいないが、仙刀は既にグロッキーだった。

顔が青くなっている。

仙刀は冷静に考える、など到底できない状態だった。

そうしている内に、一刀は突き離すのは止め、仙刀から目をはなした。

「あ？ どうした？」

「ゴメン……お前を見てたら……ちよつと……貰い……」

「止めろ！ 頼む！ 止めてくれ！」

『一刀！ お前もか！』と仙刀は言った。

そうして今度は、仙刀が一刀を突き離れた。

「ああもう！ 離れろ！」

「うおッ!？」

「……あれ？」

弱く押しただけだった。

トント、と軽く押しただけだった。

だが、一刀はよろけ、半歩下がったら真つ逆さまに落ちて行った。

まるで、突然その場から足場が消えうせたようであった。

「嘘オ!？」

「南郷貴様ア！ 末代まで呪ってやる！」

「ナンマンダブ……せめて成仏してくれよなあ……」

「本当に呪ってやらあ！」

一刀は呪詛の言葉を残し、落ちていく。

だが、突如光が一刀を包んだ。

——どうなっている!？」

仙刀がそう思うのと、彼が光に包まれるのは同時だった。

世は乱世になる。

「あれ？ 何だろ……？」

「流星でしようか？ まだ昼間だというのに……」

「二人とも西に何が見えたのさ？」

乱世になり、天の御使いが現れる。

「へえ……。昼間に、あんなハッキリと星が見えるのね」

「吉兆か……。それとも凶兆か……」

その者達白き衣を纏いて混乱の野に降り立つべし。

「どうしたのかしら？ 報告を続けて」

「はっ。領内全域を探しましたが、未だ足取りは……」

「まったく……。一体、どこに行ったのだ……」

——管路の占いより一部抜粋。

「桔梗様、紫苑様！ すぐ東の山に流星が！」

「むう……。面倒な所におちたの」

「ええ……。桔梗、私はもう帰るわ。そうした方が良いでしょう」

「うむ。焰耶！ 山を見張っておけ！」

「行かなくてもよろしいのですか!? 様子を見に……！」

「ならぬ。……山の向こうは修羅の国ぞ」

3

「何だあ……こりゃ」

仙刀はそう呟き、溜息を吐いた。

彼は光に包まれて、一度目を閉じた。

そして再び目を開き飛び込んできたのは、暗い資料館ではなく、鏡の中の空間でもなく、見晴らしの良い山の頂上であつた。

空は雲一つない。心地いいそよ風は、かすかに草木の臭いがある。

仙刀は酔いをさまそうと、深呼吸した。

登山で感じる空気を感じた。

「そういえば……一刀はどこだ？」

両肩のカバンを地面に下ろし、仙刀は周囲をぐるりと見渡したが、人影は見当たらない。見つけられ、とは思わない。

——はぐれたのか。

仙刀はそう思った。

ここから見下ろせる周囲の山の中に居るのかもしれないが、手がかり無しに歩き回つて見つけられる、とは思わない。

「どうしようかねえ……」

仙刀はアゴに手をあてた。

だが、すぐに手をおろした。

「……誰だ」

抑揚もなく仙刀は言った。

「……………」

「答えないってことは、どういうことだ？」

一刀じゃあない。

間違いなく一刀じゃあない、と仙刀は確信していた。

「侵入者か」

「質問しているのは、こっちなんだけどな」

仙刀の背後から声が聞こえた。

——どうにも完全に回り込まれているらしい。

そう思い、仙刀はその場にしゃがんだ。

その上を、元々頭の合った位置を、何かか唸りをあげて通る。

——蹴りだ。

丸太のような足が通って行った。

仙刀は両手を地面につき、左足で相手の軸足狙いの、後ろ回し蹴りを振った。手応えはない。

だが、仙刀の狙いは、相手と向き合うことだ。

蹴りの勢いごと上半身を半回転し、相手と向き合った。

「へえ……そんなツラしてたんだ。ゴツイね」

「……………」

仙刀の目に飛び込んできたのは、鼻の下に髭をはやした男だった。

髪は短く、顔に刀傷がある。

太い肉体だ。

胸は分厚く、鉄板を幾つも重ね合わせたかのようなようだ。

腕や足は女のウエスト程の太さ、という説明がしつくりくる。

上半身には服を着ず、下半身は道着のようなズボンを履いている。

「怖い身体してんねえ……………」

そう言つて仙刀は笑みを浮かべた。

右足を軽く前へ出す。

「……………」

ヒゲ面の男は何も言わない。

何も言わず、ファイティングポーズをとった。

——やりたいのか？

やるのか？ 俺と。

仙刀は両手を軽くあげた。

右手は肩の高さに、左手はそのちよつと下に。

「行くぞ」

男がつぶやいたときには既に、肉が仙刀の目の前に迫っていた。

「キエアアアアアア」

男の雄たけびは、獣のようであった。

ゾクリ、と黒い影が仙刀の背をなぞった。

仙刀が動けないうちに、丸太のような足が、腹に放たれていた。

「ちいっ」

仙刀は蹴りが腹に刺さった瞬間に、両腕でその足を抱えた。

胃液が逆流しそうだった。

一瞬、頬が膨らんだが、すぐに飲みこんだ。

そして、左手で腹に抱えた道着の裾を握った。

右手は相手の膝の下へ、もぐりこませる。

「ぬうッ」

仙刀は蹴り足を掴み、背負い投げた。

——蹴り足一本背負い。

南郷仙刀が幼いころから習う、古武道の技だった。

男の顔面は地面に強したたかに打ち付けられた。

「ツきえああア！」

うつ伏せの男に向かって吠え、構える。

その叫びは震えていた。

——立つな！ 立たないでくれ！

仙刀は震えていた。

何度も練習はしたが、初めて実戦で使った技だった。

最後までやりきったのは、初めての技だった。

「……流派はなんだ」

「ひイツ……」

男は立ち上がった。

鼻血で顔は血まみれになっている。

男の鼻は折れたのか、歪んでいた。

だが、男は意に介した様子はない。
淡々としていた。

「流派は？」

——何だコイツは!?

先手をとったハズだった。

——最初に貰ったがそれを利用し、先に大きい痛手を与えたのは俺で……
しつかりときまつた技だった。

「答えるおお!!」

「ヒイアアアア!」

仙刀は悲鳴をあげ、右の拳で殴りかかった。

もう、相手が人間だなんて思えていなかった。

顔面から地面に思い切り叩きつける。

そうすれば人は止まる。もしくは死ぬ。そういう技だった。

だが、目の前の男は生きている。まだ元気でいる。

「……弱いな」

男は心底落胆した目をし、そう呟いた。

「遅く、軽い」

迫る右手首を掴み、回す。

力だけで相手を振り回す、技術のいろいろな技だった。

男は仙刀を強引に引っこ抜き、背中から叩きつけた。

だが、それはきまらなかった。

仙刀は両足から地面につき、そして跳ねた。

男の目の前に突如、膝が飛び込んできた。

グジツツという軟骨が潰れる音がした。

「ハアツ……ハアツ……」

限界だった。仙刀の身体、精神ともにだ。

今まで味わったことのない感覚が仙刀を追い詰めていた。

相手の骨を壊す感覚。型の中だけで、実戦で使ったことのない技の感覚。それが相手

を破壊している感覚。初めてで本物の闘争たたかいの感覚が追い詰めていた。

「……先の言葉、訂正しよう。お前は優秀な闘士だ」

殺してやる。男は平坦にそう言った。

その言葉は本気の言葉だった。

仙刀にはその言葉が、初めて聞いた言葉のように聞こえた。

——怖い。

仙刀はそう思った。

「キエアアアアッ！」

だが、どこか精神が背中を押す。

——逃げられない！ もう逃げられない！

それが、仙刀に獣の叫びをあげさせた。

4

怖ええ！ 逃げるか？ それはない！ やるしかねえ！

何を？ 柔術……。古武道……。

「キエアアアアッ！」

俺は、喉が切れそうになるぐらいに叫んだ。

同時に、丸太のように太い肉体が迫ってくる。

来い！ 来い！ 真っ向からだ！

顔面に迫る拳をさばく。一つ、二つ、三つ……。

当たらないようにさばいたが、制服の襟を太い指に捕まれた。

そのまま、万力のような力で、男の胸元に引きづり込まれた。

抵抗しても……。出れない……！

そして男は膝蹴りを、俺の腹に向かって叩き込んでくる。

両腕で腹を守って防いでも、重い。

「しえあああつっ！」

男が吼えた。

反射的に、腕の守りを固めた。

腹に来るハズの衝撃を覚悟した。

甘かった。

男の狙いは金玉だった。

すねでの一撃だった。

完全に油断していたから、綺麗に入った。

足の力が抜ける。腕が一瞬だけ落ちた。

男は見逃さなかった。男の膝が、俺の腹に入った。

うめき声すら出せない。

一呼吸。

「げえええっ！」

息を吐くと同時に、黄色い胃液が地面に落ちた。

「おええええっ！」

酸っぱい臭いがする。

いや、そんなことを考えている場合じゃない！
すぐに左に避けた。

よける時、俺の頭があつた場所に、男の踵かかとが落ちてきていたのが目に入った。
俺は吐き気を必死で抑え、立つた。

「……楽しいな」

男が眩いた。

——何が楽しい。

そう言いたかつたけど、今の俺にそんな余裕はない。

秘策を残しておくには、膝をつかずに立っているのが、精いっぱいだ。

「諦めたか」

俺は腕をだらりと落とした。

男は俺が諦めたものと思っているらしい。

来い……！ 切つて落とす！

男はまず、俺にローキックを蹴ってきた。

両腕を下げたまま、受ける。

男は前に出た。

拳の間合いだ。

「ひゅっ」

男の口から軽く呼気が漏れた。

来た。右のストレートだ。真っ直ぐに来る。

それをスウエーでかわす。

このままなら倒れる程に、上半身を反らした。

でも、倒れない。

俺は目の前の、丸太のような右腕を両腕で掴んだ。

両足を首に絡め、後は体重を利用し、首を締め上げる。

——三角絞め

それも立ち姿勢での絞めだ。

三角形に組んだ両足の中に、相手の首と腕を捕らえ足の力で締め付ける。

相手の肩で右の頸動脈を絞め、自分の内腿で左の動脈を絞める。

綺麗に入った！

「ヒェアアアア」

恐怖を追い出し、気合をはき、絞めた。

「ぐううう……」

男の顔が赤くなった。

全面が真っ赤だ。

男は俺をはがそうと、左拳で滅多打ちにしてくる。

誰が解放すかってんだ。

降参するってなら、別だけどな。

「い」あ……」

男の口の端から、泡が出て来た。

落ちるぞ！ 降参しろ！ じゃないと……！

男の目が揺れる。そして、白目になり動きが止まった。

男はバランスを崩し、俺の上に覆いかぶさって倒れた。

俺は何とか這い出して、男を見下ろした。

もう、男はピクリとも動かない。

俺の体は震えていた。

初めて、本物の殺気を浴びた。

初めて、実戦を味わった。

「はあー……はあー……」

落ち着かせるため、深呼吸をした。

二回。

「見せてもらったぞ、若人よ」

「!?」

後ろから声が聞こえた。

声を聴くと同時に、背中にうすら寒い何か走った。

黒い大蛇が背中を這うような感覚だった。

「ぬうつ!?!」

反射的に裏拳で、自分の背後を殴った。

だが、何もいない。

裏拳の勢いで後方に振り返った。

すぐ背後ではなかった。

裏拳のイメージトル先に、しわがれた老人の顔があった。

「天からの客人よ。ようこそ修羅の国へ。ワシは皆からかいおう界皇と呼ばれておる」

5

顔のシワが蛇の鱗のようになっていいる老人だった。

背の高さは小中学生程度。腕は細く、垂れ下がっている。

にこやかな笑みを浮かべた、好々爺だった。

「……天からの？ どういう意味？」

仙刀は頭を掻いて、聞いた。

「カツカツカ。流星がここに落ちたのじゃ。で、そこにお主がおった」

「はあ……。すんません。いくつか質問いいですか？」

「なんなりと」

界皇は笑って言った。

「ここはどこですか？」

「修羅の国」

「福岡か……」

「修羅の国、と言うとろうが」

「分かってます。あと、もう一人この制服を着た人、見ませんでした？」

「知らん」

——知らないか

仙刀はアゴに手を当てた。

「あと……」

「待て。ここからはワシが質問する」

界皇が掌で、仙刀を制した。

仙刀は『あ、はい』と答えた。

「名は？」

「南郷仙刀といいます」

「珍しい名よの。お主の流派は？」

「流派？ 柔術です。竹川流という柔術の一派」

「何を目的とした流派か？」

「素手で、いかに人を倒すかを目的にした流派です」

「ほお〜」

興味深そうに界皇はうなずいた。

そして、矢継ぎ早に質問した。

「お主の師は」

「祖父です」

「竹川流とやらについて、師はなんと」

「対武器を想定した武術であり、1対多数も想定した武術……と」

「例えばどんなものを習った」

「絞め技、関節技、あとは打撃。眼や股間への危険技も」

「武術以外もあるのか」

「サバイバル技術もあります」

「さばいばる？」

「生き残り方……でも言えば」

仙刀は界皇の質問に答えた。

答えてしまった。

仙刀が最後の質問に答えたとき、老人は拳を仙刀の腹に叩き込んだ。

「があッ！ ……このジジイ！」

「阿呆。自分の武術を、簡単に他人に教える奴があるかアッ！」

界皇は吼えた。

そして、仙刀の制服の胸元を掴んだ。

「デメエ……！ 不意打ち……しやがるなんざ……！」

仙刀は絶え絶えになりながら言った。

だが、眼は界皇を必死に睨みつけていた。

「卑怯」とでも言いたいのか

「当たり前」

仙刀は言い切ることが出来なかった。

仙刀のアゴに界皇のハイキックが当たったのだ。

そして齒で舌を切ったのか、口からダラダラと血が流れ始めた。

「恥を知りなさい」

界皇の言葉は優しく、子どもに言い聞かせるようであった。

それが次の瞬間、一気に豹変した。

「武術の世界にはねえ……卑怯や反則なんて言葉はねえんだよオツツ」

「ツツ!?!」

界皇はそう言い、仙刀の腹に蹴りを叩きこみ、アゴを掌底で打ち抜いた。

仙刀の目が揺れた。そして、何も言わずに、うつ伏せに倒れた。

半開きの口からは、真っ赤な血が流れ出している。

「ワシが手塩にかけた修羅を、一人負かしたのじゃ。……この程度が妥当か」

界皇はそう呟き、二回手を鳴らした。

それを聞き、何人かの男が界皇の目の前に現れた。

「この二人を運べ。そして、この白い服の男には治療を」

『はっ!』

界皇はそう言い、二人は山にある家に運ばれていった。

運ばれる天から来た白い服の男を見ながら、界皇は毒蛇のような笑みを浮かべた。

もう一つの流れ星

1

俺は、修羅の国に滞在することになった。

だけど、滞在を決めてから色々あった。

まずは……ここはスマホが使えないから、家族と一刀に連絡がとれない、という事実
に気が付くところからだった。

「生きとるか？」

界皇様は俺を見下ろして聞いた。

その時、俺は見覚えのない家でスマホをいじりながら、横になっていた。

スマホは圏外になっていた。その時は『山の天辺だから、当たり前かもしれない』と
思った。

そして、スマホの時計は止まっていた。

だけど、壊れているわけではなかった。

何故ならカメラ、ムービーといった機能はしっかりと生きているからだ。

不思議だった。なんで時計がダメになっているんだ……？

「……生きてますよ。で、何の用です」

俺は一旦考えるのを止め、スマホをしまい、界皇様に向かいあった。

界皇様は笑みを浮かべていた。

そうして、信じられないことを言った。

「お主の流派は、竹川流じゃったな。それを教えてくれんか」

「は？」

「その流派に興味が湧いた。教えよ」

「興味って……」

何に興味がある、と聞こうとしたけど、先に界皇様が答えた。

「お主は、ワシの知らんことを知つとる。ワシ等と違う関節技の入り方、絞め方、投げ方となア」

界皇様は屈んで、俺を覗きこんだ。

そうして、蛇のような笑みを浮かべた。

「代わりと言ってはなんじゃが……ワシも武術を教えよう。色々と、面白いのをな」

その言葉に、心がちよつぱり動いた。

山から下りれば、家族への連絡をいつでもとれる。

俺も武術に興味があった。

ちよつとぐらい、教わってもいいか……な……。二日、三日とかそのくらい。

「お願いします」

俺は正座して、頭を下げた。

2

甘かった。甘い考えだった。

カルピスをカルピスで割り、トッピングで、練乳と角砂糖とジャムをぶち込んだものより甘い。

どんな甘党でも……例えば、キラ事件の捜査をした世界一の探偵でも、胸やけするぐらい甘い。

まずは、家族と連絡はとれなかった。

「すいません。教えてもらう前に、家族に電話してもいいですか？ 多分、心配してると思うので」

「はあ？ 電話とはなんじゃ？ そもそも、お主は天から来たのじゃ。連絡なんて出来るわけなからう」

「いや、冗談はいいんで」

「この目が冗談に見えるかのお……」

……見えなかった。

むしろ、本気だ。

あと、電話を知らないのか!? まあ、年寄りだし……っついても電話は知ってるだろ!

いや、それはどうでもいい!

天からつてどういうことだ!?! そのままの意味か!?

いや、ないない。それはない。いくらなんでも有り得ない!

「……マジ? 嘘はいらないんですけど」

「マジじゃ。大マジ。……ところで『まじ』とは?」

……この人を見ると、やっぱり嘘を吐いているとは思えない。

だけど、信じられない。

確認するには、スマホの圏内に行くしかない!

「あとで説明します! ちょっと山、下ります!」

「ええが、死ぬなよ」

界皇様はそう言つて、手を振った。

俺は笑顔で手を振りかえして、山を駆け下りた。

だけど、その元気はすぐなくなった。

「ギャアアアア! 野生が襲ってくるウウウ!」

ここは修羅の国、というだけあって入ることは生半可ではない。

そもそも「修羅」というのは、素手のみで最強を目指す漢のことらしい。

そんな奴が集まる場所だ。簡単には入れない。同時に、「出れない」のだ。

まあ……何が言いたいのかというと、山には猛獣が巢食っていた。

オオスズメバチとか、虎とか、熊とか、アナコンダとか、ライオンとか、夜〇猿とか。

……最後3つは、居ていいのか？

たまに、パンダとか癒し系がいたかと思っても、実際は卑し系だった。

白、黒、滴る赤の三色パンダとかいらぬ！ 鉄臭いんだよオ！

頑張つて下つても、スマホは一向に圏内にならない。

必死に走っていたら、いつの間にか下りきつたが、それでもダメ。圏外。

圏外だから、地図アプリも見れない。

……詰んだ。

「……で、またここを登るのか……」

その苦労を想像すると、涙がちよちよぎれた。

俺は上を向き、またあの山を登った。当然、野生に襲われた。

で……修行は山を登りきつたら、すぐに始まった。

界皇様の修行は初日から苛烈だった。

一番最初は呼吸法だった。

「南郷。力を抜け」

「はあ……」

「そうそう……覇^ハ卯^ウッ」

横隔膜のあたりを、思い切り突かれた。

その後は、肺の中の空気が一瞬で噴出していく感覚があっただけだ。

「オオ……ゴッ……」

「そうそう。まあちよつとしたら、普通に呼吸できるわい。そこから始まる呼吸の拍、深さを忘れるな」

「ゴオオオ……ゲホッゲホッ」

「失敗じゃ。もう一度」

格闘技における呼吸は非常に重要だ。

有名どころでは、空手の三戦^{サンチン}の型。呼吸のコントロールによって完成されるこの型は、完全になされた時には、あらゆる打撃に耐えると言われる。

他にも、長距離走や出産とか。あのヒツヒツフーってヤツ。

そして仙道……波紋法とか。呼吸法で、水の上走れるし。

まあ、例はいいや。

問題は、何の役に立つかだ。

教えてもらった呼吸法は、人体の潜在力を引き出すというもの。

そもそも、人体は常に全力は出せない。大抵出せるのは、命がけのときだ。// 火事場のクソ力” っつてやつ。

その潜在力は、人の全力の70%を占める。

それを引き出すのが、北斗神拳の神髄……っつて、これは関係ねえか。

そして！ その呼吸法の効能は……肉体の鎧化！ 反射神経の鋭敏化！ 自己治療力向上！ 鎮痛！ 美肌効果！ 冷え性！

後で気づいた。……ほとんど、温泉の効能じゃねえか！ 3分の2が温泉の効能だ。

ちなみに、肉体の鎧化といっても普通の刃物、例えば包丁程度で切れる。鎧化とは何だったのか。

まあ……打撃には強くなったかも。その程度だ。

で、あとは闘い続けるだけ。

昼も夜もない。殺人的なスケジュールだ。

やりたくて仕方ない男たちが、起きて闘い、飯の前にも闘い、飯の最中にも闘い、鍛錬で闘い、筋トレで闘い、便所の前に闘い、便所の後に闘い、風呂の前後に闘い、寝る前に闘い、寝てても誰か奇襲を仕掛けてくる。

地獄のような疲労を呼吸で癒す。漢からあふれる地獄のような獣臭は耐える。

日に30時間の闘争という矛盾ツツツ！ といつても、過言ではない。

それが修羅の国だった。まさしく、闘争たたかいの修羅しか生まぬ国ツツツ

俺はそこで界皇様に投げや関節技を教え、界皇様から技や技術を教わったり、修羅と闘いながら、半年を過ごした。

3

俺が修羅の国にいて、半年ぐらいたった日だ。転機が訪れた。

真昼間の時、北東の方角に白い流星が落ちた。

何となく、懐かしく感じた。

「あの流星……お前、乗って来た流星……」

「ふう〜ん」

いつの間にか修羅の誰かが、背後に回ってきていた。

俺は何も言わず、左拳で裏拳を放った。

修羅は左手で俺の裏拳を防ぎ、右肘を顔面狙いで、振り下ろしてくる。

俺は防がない。大丈夫、当たらない。

裏拳と同時に蹴り上げた俺の右足が、修羅の左のこめかみを叩いた。

修羅も、防ぐような行動をしなかった。

修羅は、棒のように、頭から倒れた。

「さて、行くか」

一言だけ呟き、俺は界皇様の所へ向かった。

そこまで、何事もなく行けるわけではなかった。

俺の姿を見て、喧嘩を売ってくる修羅もいるからだ。

結局、界皇様の所に着く頃には、夕方になっていた。

「界皇様。あの流星を見ましたか」

「おお、南郷。見たぞ」

界皇様は、道場で2メートルほどの背をもつ修羅を相手にしていた。

俺が声をかけると、界皇様は振り向いた。

その隙を狙うように、修羅は右足で前蹴りを放った。

界皇様は右につつ……と動き、修羅の右足を掴んだ。

そして蹴り足を背負い、投げた。

——蹴り足一本背負い。

竹川流の技だった。

修羅の顔が叩きつけられた瞬間、鼻の骨が潰れる音がした。

そして、血が道場の床を染めた。

「こうかのお？ 竹川流は」

「ええ。……流星を見たのなら、話は早いでしょう。あの星は多分、俺の友人だと思いません」

「ほお。で？」

「奴の所に行こうと思います」

「ふむ……」

界皇様はそう呟くと、道場の隅にある箱をゴソゴソと漁った。

「お……コレコレ」

界皇様はポイ、と白くて薄いものを投げた。

仮面だった。

目の部分しか開けてない簡素な仮面だ。

「これは？」

「修羅の面よ。修羅は皆、持っておる」

「ふうん……」

「外に行くなら持つて行け」

「ありがとうございます」

「まずは西に行け。そこに白帝城という城がある。それとあと一つ」

「あと一つ？」

界皇様はゴホン、と咳払いした。

「強くなりたくば喰らえツツ！ 男も女もないツツ！ 強き者を、喰らつて喰らつて喰らい尽くせツツツ！」

それが修羅よ……。

界皇様はそう言った。

俺は両方受け取り、頭を下げた。

4

「行つたか……」

——南郷よ、強く在れ。強くなれ。下界にも強き猛者は多い。場合によつては、この修羅より強き者もある。その者がお主の技を、力を育む。して、成長し熟れた力を持つ貴様を……

「このワシが食ろうてやる」

もし、肉食獣が草食獣を前に笑みを浮かべるとしたら、このような笑みを浮かべるのである。

自分の力で、エサを存分にいたぶることを、楽しむ笑みだ。

小さな、ごくわずかな笑みだった。

そのちいさな唇の隙間に、
獣の牙が見えた。

白帝城にて

1

「あゝ疲れた……」

俺と一刃、二人分の荷物を担いであの修羅の山を下り、白帝城という城に着く頃には、日が沈みかけていた。

「つて……白帝城つてここだよなあ？」

界皇様からは「城」と言われていたので、このデザインには面食らった。

普通、城と言ったら、あの天守閣……だったかがあるものだ。

だけど、ここは城壁に囲まれた街だ。派手な天守閣は無い。

なんか、RPGにある街って感じだ。

しかも、町の中の人の服が時代がかっている。

修羅の国では、拳法着か上裸、俺は道着に袴がデフォだから気にならなかったけど

……町の人も時代がかっているってのはなア……。何か違和感。

日光江戸村や映画村じゃあるまいし。

そんなことを考えている内に、城門が閉まり始めてしまった。

「あ、やべ。すんませ〜ん!」

俺は間に合うよう、手を振って声をあげながら走った。

2

南郷仙刀は、路地の真ん中を歩いていた。

黒い袴に黒い道着という服装であるため、ここの雰囲気と少しはマッチしている。

夜になって街の人だかりは少なく、どこか物寂しい空気がある。

道に街灯はなく、家からこぼれる明かりもないため、街を照らすのは星明りと月明かりがほとんどだ。

「まずは宿でも探すかあ……」

仙刀は頭を掻いた。

ボーっと歩いていると、前から3人の男が歩いてきた。

「おい、兄ちゃん……」

「?」

すれ違う時、3人組の真ん中の男が仙刀につつかかってきた。

ケンカを売ってきている、と仙刀は感じた。

「なんだ」

「お前がさつき、その泥をはねたせいで、俺の履物に泥が付いちまったよ」

「へえ」

「おい、その態度……なめとんのかあつ！」

真ん中の男が一步だけ、仙刀の方に寄つてきた。

仙刀は何も言わず、三人を見た。

——俺と同じか、低いくらいの背。体重は……俺より重いだろ。筋肉がある。武器は……腰に剣みてえなの持つてるな。模造でも、使われると面倒だ。

「謝るつてんなら、許してやらんこともないぜエ……その荷物置いてけ」

そう言つて、仙刀からみて3人組の左側の男は、仙刀と一刀のカバンを指差した。

仙刀は溜息を吐いた。

「履物ぐらい、普通に歩いてても泥はつくけど？」

「いや。お前にやられたんだ」

「ふうん。あつそ」

「嘗めた態度……とつてんじゃねえツ！」

真ん中の男は剣を抜いた。本物の光沢をもった剣だった。

仙刀は、興味のないものを見るかのように、一瞥して荷物を置いた。

「本物臭いな。……使うのか」

「なに？」

「使うなら使うでいい。手加減しないで済む。手加減は下手糞だから、ありがたい」

刃物には、人を正気の間人を、狂気に向かわせる力がある。

最初は、脅しに使うつもりだったのかもしれないが、仙刀の態度がそれを倍加させた。

真ん中の男のめつきが、より鋭くなった。手にした刃物のようだった。

よほど力を込めているのか、握っている手は白い。

「一応言つとくけど、こんなことでケガするなんて、勿体ないから止めとけ」

仙刀のその一言が引き金になった。

「おきやアッ！」

奇声をあげ、真ん中の男が剣を振り落としました。

真ん中の男が動くと同時に、仙刀も動いた。

両方共、ほぼ同じタイミングで動いた。

剣が落ちる音がした。

二人の男が倒れていた。

二人とも、動いていない。

真ん中の男が、苦悶に満ちた表情で、仰向けになっていた。

顔は血まみれになっている。

鼻が潰れて曲がり、真っ赤な血が流れていた。

唇も裂け、真つ赤になっている。

その中に、白いものが混じっていた。折れた前歯だった。

左にいた男は顔面が地につき、うつぶせになったままピクリとも動かない。

仙刀は、何も言わず、無造作に突っ立っていた。

「おい。お前はやるのか？」

仙刀は首だけ動かし、残った男を見た。

「ヒイイイ！ 化けモノだアアア！」

残った男は悲鳴をあげ、ヨロヨロと倒れた。

ズボンは濡れていた。どうやら、失禁したらしい。

「へえ……。イイねえ、アンタ」

残った男の後ろから、茶髪の男が来た。

髪の毛は多く、獅子のタテガミのように見える。

背は高い。2メートルはあるだろうか。

太い男だった。

腕が、太い。

足が、太い。

眉も、眼も、首も、声も太い。

「まず、剣を持ったヤツの両手にに手刀。次に、腹に前蹴り。そして、前のめりになったところで、顔をぶん殴った。次に、そのうつ伏せになっているヤツの、こめかみに上段蹴りだ。清々しい喧嘩だねえ……」

「見ていたのか？」

「ああ。久々にスツキリする喧嘩を見たぜ」

大男が感慨深そうに言った後、仙刀はファイティングポーズをとった。

それを見て、大男は笑みを浮かべた。

「油断はしねえってか！ イイねエ、良い気構えだ！ 気に入った！」

「え……？ 何て言うか……ありがとう？ で、やるのか」

ドスがきいた声だった。

仙刀は大男を睨みつけた。

「ハツハツハ！ そんな怖いツラすんな！ 俺はこいつ等と何も関係はない。酒を飲もうと思って、出歩いていただけさ」

「なあんだ」

大男の笑みを見て、仙刀は両腕を下げた。

その瞬間、大男は笑みを残したまま、獅子の顔に変じていた。

たまらない寒気が、仙刀の中をはしった。

大男の拳が、仙刀の腹に向かって吹っ飛んできた。

大男の拳を右手で受け、右足での前蹴りを放った。

「へえ……アンタ、どうして止めるんだい？」

「それはお前もだよ。その拳、速いだけじゃねえか。殺気は本物のクセして」

大男は笑った。

「そこまで分かるのかい！」

そう言つて、大男は拳を下げた。

それを見て、仙刀は足を下げた。

「悪かったな。俺も喧嘩好きなんで、アンタの喧嘩を見て、我慢出来なくなっちゃったんだ」

「我慢できなくなつたア？」

「ああ。しかも……剣持っているヤツに、加減したじゃねえか」

「してない」

「いや。アンタは加減した」

仙刀は溜息を吐いた。

大男は、くくつと笑った。

そうして大男は、また口を開いた。

「俺が言ってるのは、アンタが、普通に手加減したって意味じゃねえ」

「……………」

「確かに手加減していた。だが、本気だった」

「つまり——」

「——ぶち殺さないよう加減して、ぶちのめす加減をしなかった」

仙刀は笑った。

「丸わかりじゃねえか、俺のやったこと」

「ああ。よくくわかつたぜ。っと、自己紹介が遅れちまったな。俺は雷銅らいどう。ここで警備兵をやってるんだ」

「俺は南郷仙刀だ。よろしく」

3

「珍しい名乗りだねエ」

俺に向かつて、雷銅はそう言った。

「そうか？ まあ、仙刀ってのは珍しいか」

「いや、名前が珍しいって話だ。普通は姓、名、字に分けるか、字は名乗らないかだ」

「字あ？」

「……………字をしらねえのかい」

「うん。初めて聞いた」

そう言うのと、雷銅は一瞬だけ怪訝な表情になった。

とは言っても、字なんてねえよ。あだ名はあるけど。

「そんなデカくなるまで、どんな環境にいたんだい？ 親が普通に持っているだろうよ」

「ウチの両親に字はないな。名字と名前だけ。外人ならミドルネームとかあるけど。て

か、何でお前は字なんて持っているんだよ」

「みどるウ……？ 初めて聞いたぜ、そんな言葉」

なんだか、違和感を感じた。

修羅の国でも、何度か感じていた違和感だ。

ちよつと、この違和感が何なのか、分かりかけてきた。

「ドッグ。アップル。DVD」

「あんだ何言ってるんだい？」

やっぱり通じない。

誰でも知っている言葉だ。

現代人なら普通に分かる言葉を、チヨイスしたつもりだ。

それでも通じない。

「全部知らないのか」

「ああ。3つとも初めて聞いた」

「普通に知ってる奴が多いと思うけど」

「……どうもオカシイねえ」

「俺もそう思う」

普通に分かるだろう英語が、誰も分からない。

これが一番オカシイ。

教科書にしか出ないようなものならとにかく、日常的な物や、小学生でも分かるような単語が、誰にも分からないのはオカシイ。

「話し合う必要があると思うだ。というより、個人的に話したいね」

「俺もだ。あ……ついでに一泊、泊めてもらえるとありがたい」

「なら、イイところあるぜ。ついてきな」

そう言つて雷銅は背を向けた。

俺はその背を追っかけた。

4

「イヨオ仁！ 起きてるかあ!?!」

「何だ、慶。……夜中に騒がしい」

俺が雷銅の背を追っかけてついたのは、これといった特徴のない家だった。

明かりも少なく、薄暗い。

雷銅が大声出してドアを開けると、住人が不機嫌そうな顔をして出て来た。若い男だ。

髪は光を吸い込みそうなほどに黒く、腰に届きそうな長さだ。

後ろ髪は首の所で、髑髏が掘り込まれた、筒状の髪飾りで一本に纏められている。

体つきは華奢で、肌は白い。

手足はスラリとして、まるでモデルのような印象がある。

だけど、背の高さは俺と同じぐらいか。

眉は細く、眼は鋭い。

「……その男は？」

「ああ。ついさつき、知り合ったんだ」

「南郷仙刀だ。よろしく」

「私は冷苞れいほうだ。まあ……どうでもいいが。で、何用だ」

「いや、コイツと話をしてみたら来た。面白いぜ」

「帰れ。私の家は酒場ではない。外で話せ」

「寒いじゃねえか。夜風がキツイんだ」

「……ふん」

冷苞は鼻を鳴らして、背を向けた。

それを見て、雷銅は笑みを浮かべた。

「よし、入るか」

「いや、帰れって……」

「いいんだよ。本気なら、とつくに扉を閉めている」

「はあ？」

「あと、アンタ寝床ねえんだろ？ 今夜はここで一泊してくれ」

はあ!?

と、俺が返す前に、雷銅は家に入ってしまった。

仕方ない。俺も入るか。

家に入り、明かりのある部屋に行くと、テーブルの周りに、座布団が三つ置かれていた。

雷銅は一つの座布団の上で、胡坐をかいている。

冷苞はその隣で正座をしていた。

で、俺は荷物を適当なところに投げ、対面にある残された座布団の上に座った。

「で、単刀直入に聞け。アンタ、何者だい？」

「何者って…… “人間” としか言いようがない」

「慶が言ってるのは、そういう意味ではないだろう」

冷苞が口を挟んだ。

「貴様がどこか異様な理由を教えろ……ということだ」

冷苞がひんやりと、冷たい目で俺を見た。

「……俺としてもよく分からねえよ」

「どういうことだい？ 順を追って話してみな」

「……ああ」

俺は小さく頷いた。

「まず、学校の資料館に行つて……」

俺は今までの事を全部話した。鏡を割つたこと、変な空間に入ったこと、気が付いたところから込みいたこと、修羅の国で世話になつていたこと。

全部話した。

雷銅は俺の言う、非科学的な話しを茶化すでもなく、相槌を入れながら聞いてくれた。冷苞は何も言わず、時々うなずいた。

「以上」

「……………」

「……………」

二人とも何も言わず、眉間にしわを寄せていた。

重々しい空気だった。

「で、それが真実……ってか」

「そうだ。だから、ここがどこなのかも分からない。益州とは一度聞いたけどな」

「成る程ねエ……面白い話を聞かせてもらった礼だ。俺の分かることなら、何でも答えるぜ」

そう言つて雷銅は笑みを浮かべた。

「まず、ここが益州つてのは知つているみてえだから……ここは『漢』つて説明した方が良いか」

「漢？ 聞いたことない国だな。忘れているのかもしれないけど。……ちよつと待つてくれ」

そう言つて俺は荷物から、スマホを取り出した。

そうして、辞書機能を開いて、漢と打ち込んだ。

「面白そうなものを持つてるねえ……仁！ 見てみな！」

「……興味がない」

雷銅は俺の手元を覗きこんできた。

時折、はあく、とかほおく、と声を出す。

「え〜つと、漢……男のことと……古代中国の王朝？ え？」

紀元前とか書いてある!? 昔すぎるだろ! キリスト生まれる前!?

いや、一応、前漢と後漢なんてあるし……。

駄目だ。混乱して、何考えているのかも分からない。

素数を数えて、落ち着けるわけもない。孤独な数字じゃダメだ。

「今つて、前漢? 後漢?」

「後漢だ。もつとも、もうすぐ終わりそうだな」

「というより、終わる。黄巾が既に暴れている」

雷銅の表情は大真面目だ。

やつぱり、嘘をい吐いているとは思えない。

今までの経験から、最悪の答えが頭を過った。

「まさか……タイムスリップウ!」

本当に……最悪だ……。

「何だア? そのたいむつてのは」

「過去や未来に行くこと……この場合は大昔……」

俺は机に突っ伏して、答えた。

「証拠を出せって言ったら、アンタの手にあるソレがそうだしなア」

太い指で頭を掻きながら雷銅が言った。

「まあ、スマホこんなのなんて、帝王だつて持つてねえしな」

「そりやそうさ。で……何て言うかよお、アンタ半年前にこっちに来たつてえ話だな」

俺は若干どもつて答えた。

何でそんなこと確認……つて、ああ。

「今日も落ちたな、あの流星」

「それよ」

「はあ……貴様等は私の所に、面倒事を持ち込んできたのか？」

「どういふことだ？」

冷苞は舌打ちをして答えた。

「あの星は、『天の御使い』が乗るもの、と噂されているものだ。それが二つある、ともな」

「噂だろうが。……てか、俺が……と言うより、俺達がそんな胡散臭いものなのか？」

「条件は満たしているねえ。普通なら、誰も知らないことを知っていて、誰も持つていないものをもつている」

「……で、お前等は俺が、そんな胡散臭いものだつて思つてんの？」

雷銅は胡坐をやめ、片膝をあげた。

「半分つてとこさ。証拠はあるが……」

「性格……というより、人格がダメだ」

あれ？　なんか、人間性を否定された気がしたよ？

「おい、冷苞だったよなあ？　人を見た目で判断すんじゃないよ」

「私は内面を判断した」

「第一印象で判断すんな！」

「印象は大体を間違えない」

……コイツ嫌い。

ちよつと冷苞コイツにイラツときて突っ込んだら、普通に返してきやがった！

雷銅は普通に笑っているし……！

「やっぱり、アンタは天の御使いなんていう、大層なものじゃねえや！」

雷銅は爆笑した。

何笑っているんだか。

「こんなガキみてえな御使い、いてたまるか！」

「雷銅……！」

「いやいや、バカにしてるんじゃないやあねえ。気に入ったってことだよ」

ハアーツハツハツハツハ！

と、雷銅はもう一段大きく、爆笑した。

5

俺はハア……と溜息を吐いた。

でも、こんな温かい雰囲気は久しぶりだった。

……ちよつと甘えたこと言ってもいいかな。

「なあ雷銅。俺のこと気に入ったって言ったよな？」

「おう。多分、コイツもな」

そう言つて雷銅は、冷苞を指差した。

「私は気に入らんがな」

冷苞はそう言つて、プイと顔をそむけた。

「なあ……お前らに頼みがあるんだ」

「なんだい」

「なんだ」

一呼吸。

「半年前のが俺なら、今日落ちたもう一個の流れ星は多分、俺のダチだ」

「へえ」

「ふむ」

「そこまでの旅……それに、つきあってくれねえか？ 一刀と合流してえんだ！ 頼む
！ こっから先は道、分からねえから付き合ってくれ！」

俺は、深々と土下座した。

遠回り

1

「仙刀オ！用意できたかい!?」

「はええな慶けい！まだ飯の最中だ」

「貴様等！私の家で騒ぐな！黙っている！」

「お前が一番ウルセエんだよ！仁！」

「仙刀オ……アンタが一番騒いでいるぜ」

こいつ等は、俺の旅に付き合ってくれるらしい。

本当にありがたい話だ。

中国なんて旅行でも行つたことないし、今後も行く予定はない。

だから、土地勘なんてまったくくないから、本当にありがたい。

こんなに仲いい関係になれるとは、昨夜はまったく思わなかった。

何故なら……。

2

俺が土下座したのを見て、雷銅は笑った。

「友人の所へねえ……よつしや！ 協力するぜ！」

「え……？ でも、仕事あるだろ？ そんな簡単に……」

「いいんだ。この警備兵しごとも飽きてきたからな。丁度最近、ちよいとブラブラしようと思っていた所でね」

「……ありがとう！」

俺は深く頭を下げた。

雷銅は俺の背を、いいんだと言ってポソツと叩いた。

「仁！ お前さんはどうする？ 男二人旅するつてもねえ……」

「……私の人生の目標、言った事はないか？」

冷苞はいつの間にか、本に目を通していた。

興味のないオモチヤを見るような目だった。

「激しい『喜び』はいらない。代わりに深い『絶望』もない。植物のような、平穏な人生を私は送りたい。それが目標だ」

冷苞はそう言って、本を閉じた。

「だが……見知った顔に死なれるのも気分が悪い。そして、ここは安息の地ではない。……それなりの土地を見つけるまで同行しよう」

「よし！ 仙刀オ！ 北東への旅、楽しもうか」

「……ああー！」

雷銅は笑顔で俺に拳を見せた。

俺は、コンと自分の拳をぶつけた。

ここまではよかった。問題はここからだった。

「さて、一緒に旅するってんなら、お互いに聞きたい事を聞いておこうじゃねえか。旅の真つ最中に聞かれても迷惑だ。もつとも、俺達は聞きたい事を聞いたがね」

そう言われて、ちよつと考えた。

うーん……なら……

「まず一つ」

「オウ」

「お前、冷苞アイツから慶つて呼ばれてるじゃん。何なの、ソレ？」

そう言った瞬間、空気が凍った。

……え？ 何？ 俺、何か悪いこと言った!?

雷銅を見ると、さつきまで笑っていた顔は、無表情になっていた。

ホントに何!?

「……阿呆だな」

冷苞は冷めた目で、こつちを見ていた。

なんでこうなってるの!?

「一つ言っておくぜ」

「な、何だ？」

雷銅の声は低い。なんとなく、不気味に響いた。

「ソイツは真名ついていってな。その人の本質を表す神聖なモノだ。イイって言われた奴しか、呼んじやいけねえ」

雷銅はズイと俺に寄り、凄む。

顔の影が深い。そのせいか、初対面の時より迫力を感じた。

「スマン！」

俺はもう一度土下座した。

本当に怒っているなら、そうするしかない。

「イイって事よ！」

雷銅はそう言い、俺の背中をバンツと叩いた。

「痛ウ~~~~ツツ」

「許すのか？」

「当たり前だろうが。俺はコイツのこと気に入ってるんでね。それに、真名を知らな
いってことも考えていた」

雷銅はそう言つて、爆笑した。

許された……のか？

めっちゃ背中がヒリヒリするんだけど。

「イツテエ〜」

「まア、本来なら殺されるようなこと、しでかしたんだ。その程度で済んだって思いな！

さて、じゃあ真名を預けるか」

「彘？ いいのか？」

「いいんだ。俺の真名は慶！ よろしくな」

「俺にはそんなの無いからな……。まあ、仙刀つて呼んでくれりやいいよ」

よろしくな、そう言つて握手した。

そして、今度は冷苞と向かい合った。

「じゃあ冷苞……お前の真名はその、慶が言つてたアレか？」

「仁だ。……アレ呼ばわりするな」

「分かつてる。だけど、呼ぶのはちよつとな。ぶつ殺されたら嫌だし」

「そうか。次からは真名で構わん」

そう言つて、冷苞は背を向けた。

「さて……食い終わったな」

「ウゲ……無理やり胃に突っ込んだから気分悪い……」

「我慢しろ。さて……慶、地図はあるか？」

「これだろ」

「そうだ」

朝飯を食い終わり、俺達は一つのテーブルを囲んだ。

そこに慶が地図を広げた。

「さて、ここに現在地だ」

その地図は中国の一部が描かれていた。

仁は、益州と書かれた部分を指差した。

地図の上を、仁の細い指が動く。

「いきなり北？ 遠回りじゃねえか。目的地は北東のはずだけど？」

「まあ聞きな。仁にも考えがあるハズさ」

「ああ。まず、涼州に行きここで馬を手にする。そっちの方が良い。資金は……」

そう言い、仁はチラッと俺を見た。

「俺があてなの？」

「そうだ。貴様なら何か、高値で売れるものがあるだろう。未来の道具が」

「うくん……色ペンとか？」

「それが何かは知らんが、心当たりがあるならいい。上手くいけば、馬など楽々買える」
仁はまた、眼を地図に向けた。

「次は荊州を目指す」

「何でエ……また遠回りか？ この洛陽つてとこ、通った方が近いぞ」

「そうだ。だが……」

「アンタは天の使いを名乗れるんだ。それで、洛陽なんていう皇帝のお膝元通つてみな。
面倒事になるぜ」

慶が解説してくれた。

なるほど。なるべく、面倒を避けるってことか。

「そうして、この……」

「陳留ね。曹操のお膝元か。まあ、治安は良いからありか」

「成る程。じゃあ、仁はそこで旅を止めるのか？」

「ふざけるな！」

「ツツ!? 何だ急に怒鳴って！」

ビクツとしたじゃねえか！ 驚かせやがって！

「仁。何かあるのかい？」

「いや……まだ、どこが良いのか決まっていけないからな。ここは素通りだ」
「たかがそれぐらいで怒鳴るなよ……。あー耳が痛い」

鼓膜が破れるかと思つたじゃねえか。

耳をポンポンと叩き、調子を確かめる。うん、平気だ。

「で、あとは……」

「ここまで来たら、聞き込みしかないか」

「そうだな。まあ、まずは……行こうかア！ 涼州だ！」

4

「ふく……どうかしら、月。久しぶりに外に出るのもいいものよ」

「詠ちゃん、私、まだお仕事が……」

「いいの。全部、ねねに押し付けたから」

「帰ったら、怒られちゃうよ」

「いいのよ別に」

森の中に、二人の少女がいた。

一人は、淡い青の髪を、肩のあたりまでのぼしている少女だ。

もう一人は、眼鏡をかけた緑色の髪の少女だ。

森には日がさし、小川が流れている。牧歌的な雰囲気のある明るい森だ。

周囲には、誰もいない。

そこに、ぬっと暗い影が出来た。

「詠……ちゃん……」

「どうしたのよ……ゆ……え……う？」

まず、最初に影に気づいたのは、淡い青色の髪の少女だった。

次に、緑色の髪の少女が気づいた。

「キヤアアアアア!!」

影の正体は、一頭の大きい虎だった。

5

「竹川流奥義！ 根止め！」

涼州への旅は正直、過酷だ。

なにせ、乗り物がないからだ。そのため徒歩で向かうことになる。

で、徒歩なんてしてたら、当然時間がかかる。野宿をする羽目になる。

地面で寝るのはツライ……。

起きた時には、背中や肩がバキバキになる。

さらに、野生動物に襲われることもある。

というより、襲われている。

「虎と格闘ねえ……」

「……馬鹿だな」

「いいじゃねえかよ！　『虎殺し』とかカッコいいじゃねえか！　神心会の武神みたいだよオ！　それに、野生動物とやるのは初めてじゃないし！」

大きな口をあげ、虎が飛び掛かってくる。

俺は、その口を狙い、拳の突きを放った。

勝算はある。

意外なことに、動物は口に突っ込んでくるものは噛まないのだ。

そして、口に拳を突っ込むことで、竹川流の奥義の一つで相手の呼吸を塞ぐ技『根止め』が発動する。

虎は気管を塞がれた苦しみで、悶え始めた。

すぐに拳を抜き、虎の眉間を左の直突きで打ち抜く。

直突きは、日本拳法の技だ。最速最短コースで相手を打ち抜く技で、スピードと破壊力、ともにある。

虎は吼えた。その咆哮には恐怖が混じっていた。

……勝てる！

「カアッ！」

短く呼吸を吐き、右の手刀を虎の首に落とした。

虎は血を吐き、倒れた。

「見たかオラア！」

俺は虎の頭に右足を置き、吼えた。

「やかましい。で、これはどうするつもりだ」

「あだつ。頭を叩くなよ、仁」

平手で叩かれ、パンツといい音がした。……ちつとは遠慮してくれよ。無傷とはいえ、疲れているんだからよ。

仁は謝るでもなく、虎を見下ろしていた。

コイツ……!!

「持っていくのが一番いいだろうなア……。毛皮も肉も売れるぜ」

「ならそうするか。折角、殴り殺したんだ。腐らせるのも勿体ない」

「そうか、任せた」

「え？ かつぐの俺だけ!？」

慶と仁は俺の肩をポンと叩き、そそくさと先に行ってしまった。

「チクシヨオ！ 意外と重いぞ、コレ！」

文句を言いながら虎をなんとか担ぎ、二人に追いついた。

「おい、重いんだけどコレ。ちよつとぐらい持つてくれよ」

「尻尾ならいい。ほう……フサフサだぞ、この尻尾」

「ザケンな仁！ 交代するか、腹もて腹！」

「私は貴様のような馬鹿力はない」

「まあ、これも鍛錬さ」

「なら慶が持つか？」

「ハツハツハツハツハ」

「笑つてごまかすなアアツ！ 手伝え！」

虎の重さに耐えながら、なんとか歩く。

下手すれば、つてか多分この虎、200キロ超えてるだろ……！

俺達は時々休み、時々手伝ってもらいながら、虎を運び続けた。

大體、3時間ぐらい運び続けた頃だった。

「キヤアアアアア!!」

……あれ？

二人分の悲鳴が聞こえた。

声のした方を見ると、女の子二人が倒れて……つて、え？

「……何事？」

俺が眩くと、仁は倒れている二人に近寄った。

仁はフン……と鼻を鳴らした。

「この女は金持ちか、身分の高い女とみた」

「マジか？」

「だろうねえ。服の出来が俺達と違う」

「となると……護衛がいても……」

そう言い、仁はアゴに手を当てた。

まるで、それが合図だったかのように、誰かコツチに向かってきた。

「月〜！ 詠〜！ 何があつたんや!!」

向かってきたのは、関西弁でしゃべる紫髪の女だ。

片手で薙刀のような武器を握っている。

「……奴が護衛のようだな。丁度いい。二人とも、私に口裏を合わせろ。馬をタダで買

えるかもしれん」

仁はボソリと呟いた。

護衛の奴に向かつて、仁は歩いて行つた。

その間に、俺と慶は倒れている二人を起こした。

「お〜い、生きてるか〜」

「ほら、アンタ等は無事だ。目え覚ましな」

「ん……うう……月!? 月は無事!?!」

「よし、コイツは起きたぜ!」

「こつちも反応があつた! おい! 起きろ!」

月、と呼ばれたこの子は、ちよつと身じろぎした。

「月! 無事!?!」

「詠……ちゃん……」

「月! よかつた……」

「詠ちゃんも……無事……?」

「うん! ボクは大丈夫だから……!」

二人とも、目がうるんでいる。

さて、あとは仁ちゃんが上手くやってくれるだろう。

俺達は上手くそれに合わせるだけだ。

6

俺達はどこで会つた三人に道案内をしてもらいながら、城に向かつた。

それはいい。それはいいけど……

「いや……そうやったんか。しっかし、あそこに虎がおるなんてな」

「ああ。それで、襲われかけていた所を、この男が殴り殺したというワケだ」

「そうなんですか。ありがとうございます。えくつと……すいません。お名前を聞いても……」

「雷銅つてんだ」

「冷苞です」

「……南郷つす」

「ありがとうございます、皆さん。私は涼州太守の董卓です。真名は月と言います」

「ちよつと月！ そんなヤツ等に真名を！」

「だって私達、危ないところを助けてもらったんだし……」

罪悪感がああああ！ 罪悪感がやべえ！ どうしよう、冷や汗が垂れているの、ばれていないよな!?

——仁が口裏を合わせろ、というから合わせたら、とんでもないことになった。

どうも、あそこに倒れていたのは、この太守とその軍師らしい。

倒れた原因は、多分俺。というか、俺が担いでいた虎。

それに驚いて気絶したのだろう。

それだけでも問題だったのに、仁は、そいつら相手に詐欺をかましやがった！

『虎が襲いかかるときに、その仙刀おとこが横から虎に飛び掛かり、殴り倒した』って！

「マズインじゃないか、と思いつつ理屈で押し切られた。ん』って理屈で押し切られた。」

「ばれたら一巻の終わりだろ。」

「南郷さん、どうしましたか？ まさかケガを……」

「そんな俺の気を知ってか知らずか、月は心配そうに聞いてくる。」

「止めて……頼むからそんな顔で俺を見ないで……。」

「罪悪感が酷いんだ……。」

「止めろ！ その澄んだ目で俺を見るな！ 見ないでくれエエエ!!」

「……いや、何でもない。俺は真名ってヤツはないから、仙刀って呼んでくれ」

「仁で構いません」

「慶だ。よろしくな」

「なんでコイツ等は平気なんだよ……。」

「素で嘘を吐き続けるコイツらはすごいと思う。」

「そんなことを考えていると、紫の髪の女が話しかけてきた。」

「へえ……聞いたで。素手で虎を殺したんかい。やるなあ。興味がわいたで」

「えつと……張遼だったつけ？ あんまり驚かないんだな」

「霞でええよ。月が預ける言うたんやし」

「ああそう？　じゃあ俺は仙刀でいい……で、霞。また聞くけど、あんまり驚かないってことは、他にも出来る奴の心当たりがあるのか？」

「あるで。でも、恋はそないなことせんだろうし……。まあ、素手で殴り殺す阿呆は仙ちーくらいやろ」

「仙ちーって……及川と同じ呼び方じゃねえか」

恋……ってのは多分、真名か。呼ばない方が良いな。

だけど、何か気になるな。

そんなに強いヤツなのか？

「で、月様。一つお願いがあります」

「様なんてつけなくても……」

「太守殿ですし、様をつけた方がよろしいでしょう」

「ですが、あなた方は命の恩人ですし……」

俺が霞と話している内に、仁はポンポンと話を進めていく。

表面は恭しい態度だけど、内心では絶対、ほくそ笑んでいるだろうな。

慶は何も言わず、突っ立っている。

「私達は東への旅への途中です。その旅のため、馬三頭を頂けないでしょうか？」

本当におっぱじめたよ。こいつもう、ただの詐欺師じゃないか？

ひとの善意を逆手に取るって、最悪だろ。

「分かりました。三頭でよろしいのですね」

「はい。各自に一頭いれば十分です」

あ、仁！ 今、微妙に笑った顔が見えたぞ！

悪魔みたいな笑顔だ。

それに対し、ポンと馬をくれる月は天使みたいだ。

見ると罪悪感湧くけどな！

「さて、これでまず一つだ。馬に乗ったらすぐ、荊州に向けて行くか？」

「早めの方が良いだろうな」

仁は俺達に向かい、聞いてくる。

慶も次の目的地を楽しみにしているって顔だ。

そういえば……「馬に乗る」ってのが大前提なんだよな。

……言った方がいいよな。

「え〜つとその、スマン。俺、馬の乗り方知らんから……出発でき……ない……」

「はああああ!!」

馬乗り

1

「大丈夫……。ジョ○ヨ7部にマ○バオー、さらに頭○字Dに湾岸ミツ○ナイトも読んだんだ。イケる！ つて、ニャアアアアアアッ！」

「……………」

「ミギャアアアアアアッ!? イツテえ……。受身したからいいけどよ。もう一回だ。キョアアアアア!!」

「……………」

「こんのクソ馬……。人間様を嘗めんなアアアツッ！ キヤオラアアアアツッ！」

「……………」

「ギャアアツ!? どこ行くんだよコイツはアツ!? ああ、クソツ！ 足が引つかかって…………… 擦れる擦れるスレル！ 熱いッ！ ハゲるっ！」

「……………」

「ウググググ……。無理い！ もう無理っ！ 馬なんて乗れるかア！」

「ハアっ……………」

何度も馬に飛びつき、乗ろうとしたけどコレは無理だ。

乗ると何度でも暴れて、振り落とされる。更に落ちた時、鞍に足が引つかかり地面と擦れる。

乗り方は何度か説明されたけど、それをやって実践できるかはまた別だ。

「……下手糞」

「下手糞だねえ……」

「うるせえ仁！ 慶もだ！ 何でお前等は普通に乗れたんだよ!？」

「習ったことがある」

「厳顔って人から、習ったことあるんでね」

俺が苦戦する中、何故かこの二人は簡単に乗りこなしていた。

それ見て、コイツらに出来るのなら、俺にも出来るんじゃないかと思つて頑張つた。

だけど、現実是非情だった。

乗ったら振り落とされ、走らせたらワケのわからん方に走る。そして落とされる。その繰り返し。

「……仙ちー、馬乗るのヘツタクそやなあ……。さつき説明したやろ？」

「説明されたけどよオ！ できないんだよ!!」

「そんなやけくそにならないで、もう一度、やってみたらどうでしょうか?」

「無駄よ、月。コイツもう、才能がないもの」

うん、それには気付いている。

だけど、不思議なことに、はつきり言われるとむかつく。

スゲーむかつく。

「この眼鏡エ！一言で片づけんな！」

「眼鏡!? ボクの名前は賈駆って言うてるでしょ!? 真名も詠って言ったわよね!」

「いいだろうが! もう、眼鏡って印象しかないんだよ! 他に特徴あると思ってるのか!!」

「あるわよ! あるに決まっているでしょ!!」

「じゃあなんだ!? 眼鏡が本体だろうが! お前は眼鏡のス〇ンドだろうが!! もしくは生命力の像だろうが!」

「〇たんどって何なのよ!? ていうか、ボクの命を眼鏡にする気!?」

『ハア…………』

気付いたら、眼鏡とギヤーギヤー言い合っていた。

…………それを見ている周りの人に、溜息を吐かれた気がした。

「へう…………。詠ちゃん落ち着いて。仙刀さんも」

「ボクは落ち着いているわよ!! 騒いでいるのはソイツよ!」

「黙れこのダボ！ 眼鏡割るぞ！」

「ダ……ダダダ、ダボ!? アンタに言われたくないわよ！ あんたは頭の中、何もなくてしょー！」

「言つたな、このアマツ！」

「仙刀、落ち着けと言っている。さつさと馬に乗れ」

詠と口喧嘩していたら、仁が俺の頭に空手チョップをした。……若干、仁の顔に血管が浮かんでいる気がした。

はあくあ。〃さつさと馬に乗れ〃 っって言つてもな。

「つて言つてもよお。乗り方つて『馬に跨ったら、腹を叩く』だろ？ そうしても暴れるからダメなんだよ」

「強く叩き過ぎとちやうの？」

「普通のつもりだけどなあ……。他にコツつてあるのか？」

「ないで」

霞はキツパリ言い切った。

「ハア!？」

「だつて、そうすれば普通に乗れるんやから」

「乗れねえんだよ!? その〃やればできる〃理論止めてくれよオ〜！」

「まあまあ。いったん乗ってみいや」

霞は、俺がさつきまで乗っていた馬を引つ張つてきた。

さつきまで暴れ馬だったその馬は今、とても大人しくしている。……さつきと大違いじゃねえか。

「……何でソイツ、今はそんなに大人しいんだよ。……ま、乗ればいいんだよ？」

俺は馬の背に手を置き、右足から跨つた。

よし、ここまではオツケー。

「で、馬の腹を叩くんどう？」

「弱く叩くんやで」

「分かつてオオオオオオ!? 何でだよ!? まだ叩いていないのに! 勝手に走り出した

ぞ!? ギョアアアア!!」

気が付けば振り落とされ、また地面に落ちていた。

地面が草で、受身をとつたから怪我はないけど、何回も落ちると流石に痛い。

尻を叩いて、汚れを落とすのも何度目だか……。

「馬に嫌われたんやろ」

「……馬に嫌われてる」

「やっぱり……?」

……起き上がったところで追い打ちされた。

そう言われ、どうしたものかと思い、ボリボリと頭を搔いている時に、見覚えのない人と目があつた。

日に焼けた肌に、赤い髪の少女だ。物静かな雰囲気だけど、何でか、コイツはヤバいという直感がある。

「なあ、霞……。誰？」

霞の肩をポンと叩いて聞いた。

霞は、ああと言って紹介した。

「恋……つて、真名はあかんか。呂布つていうんや」

「……霞、真名預けたの？」

「まあ、月があずけとるしなあ」

呂布、ねえ。

……。

「おい、仙刀オ。何考えているんだい？」

「呂布つてのと、鬨りてえなあと思つてな」

「勇ましいねえ。だけど、そいつは後にしな。まずは馬だ」

確かにそうだ。速く乗れるようにならないと。

いざとなったら、馬に二人乗りつて一瞬だけ考えたけど、自転車チャリならとにかく、馬に二尻なんてするのはキツそうだ。

そう思っている、月がおずおずとしながら、一つ提案してきた。

「あの……仙刀さん、あまり馬に慣れていませんよね……？」

「……見たとおりですよ」

「なら、老馬がいいと思うんです」

「老婆ア？ ババアに乗るって……冗談キツツイな、月」

「そ、そうじゃなくて！ 経験豊富で大人しい馬に乗るのが良いと思うんです」

「あ、それええなあ。変に若い馬に乗って、扱いきれず危ないところで落馬、なんてしよつたらオダブツやし」

そういう意味で、老馬がいいってことか……。納得のいく話だ。

「月、ここに老馬を連れて来たらしいのね？」

「うん。詠ちゃん、お願いね」

月に頼まれた詠は、すぐに目的の馬を連れてきた。

馬の判別つて、見ただけで分かるモノなのか……？

「で、これに乗るのか？」

「そうよ。さっさと乗りなさい」

「へーへー」

生返事をして、馬の背に跨る。ここまではいい。乗るまではいい。

問題はここからだ。

「で、腹を叩くと動き出すんだろ？ よっ」

仙刀はポンと足で馬を叩いた！

老馬は逃げ出した！

仙刀は振り落とされてしまった！

「何も変わらねええええー！」

「大人しい老馬に……ぶぶつ……すぐに落とされ……ぶぶつ……」

「笑うな霞ア！」

「いや、仙ちー、落ちるの慣れてんなあ」

「うるせえ！ そんなにキレイだったか？ 俺の落ちっぷりはよオ！」

「それはもう。こう……」

「見せなくていい！ って、うおマジでそんな？ 本当にキレイだ」

ひかえ目に言っても、ミケランジエロの彫刻のようにつてか。

って、霞。受身まで再現する必要はないだろ。

「貴様はさっさと馬に乗れ！」

「アンタはさっさと馬に乗れ！」

「怒られてもうたなあ」

仁と慶に怒鳴られ、背中を蹴られた。本当にこいつ等、遠慮なくなってきたなあ……。多分、喜んでいいのだろうけど。

「さて……………」

「……………」

馬に跨ったところで、道着のズボンの裾をクイクイ引つ張られた。

さっきの赤毛……………呂布だったつけ。

「どうした？」

「……………強く蹴っちゃダメ。……………嫌がっている」

「強くって言っても普通にポン、とやってるだけだけど？」

「……………撫でる」

「足でか？」

俺がそう言うと、呂布は無言でうなずいた。

……………ものは試しだ。一回、やってみるか。

足で撫でる……………つと。

「お！ 歩いた！」

『おおくー!』

さつきまでとは違う出だし。

あとは、蹴れば走るのか?

「これで腹を蹴ればいいのかー!?!」

「加速に気をつけなア!」

「変に蹴ると振り落とそうとするで!」

「頑張つて下さーい」

「気をつけないと、また落ちるわよ!」

ワイワイと声援が聞こえる。その中には、アドバイスもある。

その通りに……上手く……。

「おっ? おっ! 走った走った! で、曲がるのは!?!」

「体重を行きたい方へ傾けろ」

「あんがと、仁!」

よしっ! 本当に曲がった! 上手く、Uターン……できた。さて、元の位置に戻るか。

「さつきまであんな落ちてたとは思えんなあ」

「月の提案が大当たりしたわね」

「南郷さくん！ 今度は止めて下さ〜い」

「分かつてる！ 確か……」

……あ。ヤバい。乗る事だけ考えて、一つすっかり忘れた。

「なあ……止めるのつて、どうやんだ……？」

『バカー〜!!』

全員（俺以外）の声が綺麗に揃った。

「るつせえ！ 仕方ねえだろ！ 止め方を忘れたんだから！」

「仙ちー、ホンマもんのアホやなあ！」

「さっさと飛び降りろ仙刀！」

「すぐにおりなさい！ 月が巻き込まれるわ！」

「速いから恐いッ！」

「貴様は……！ さつきまでで、何回落ちたと思ってる！ 今更問題ないっ！」

「それでも恐いんだよオウ！」

「月と詠はこつち来なあ！ もうここは危ねえ！」

「えっ!? キヤアッ！」

「慶！ ちよつと無理やりすぎよ！」

慶は月と詠を抱えて、俺が通るであろう場所を離脱した。

仁と霞は自力でよけた。だけど……。まだ呂布が残つていやがる！

「呂布ウ〜！ どけええええ！」

俺は、力一杯叫んだ。それでも、呂布は動かない。

せめて、少しでも道をずらそうと、俺は左に傾けた。

「……止まつて。……よしよし」

呂布は一言だけ呟くと、馬は止まった。

大統領命令ですよ、あれじゃ。止まりましたもん。ピタつて。

「止まつ……た……？ なあ、呂布。どうやった？」

「……頼んだ。あと……恋でいい。……月達もあずけている」

「分かった。俺には真名つてもものないから、仙刀でいい」

「……仙ちいじやないの？ ……霞がそう呼んでた」

「それでいいよ……。とにかく、この馬止めてくれてありがとう」

今度はしつかりと足から降りる。

で、これを自力で出来ないだとダメなんだよな……。恋から馬の止め方でも習つておくか。

「なあ、恋。どうやって馬止めたんだ？」

「……頼んだ」

「いや、そうじゃなく」

「……………」

恋は不思議そうに首をかしげた。

……いや、なんで動物に頼めるんだよ。こりや、参考にならねえな。

「恋、他にもうちよいコツみたいなのを……」

「……他？」

「ちんきゅ〜きいつく！」

「うおっ!? 危ねえぞ、おい」

「お前〜! 恋殿の真名を……!」

恋と話していると、後頭部から変な殺気を感じた。

ひよいつと躲し、飛んできたのを掴んだ。どうやら、上手いこと足を掴んだみたいだ。

蹴ってきたのは、薄緑の髪の子だ。

「いや、真名は預けられたし。てか、お前誰？」

「お前なんかには答えないのです!」

「ふ〜ん」

俺はコイツの両足を掴み、逆さづりにした。そして、ぶらぶらと左右に振る。気分悪くなるぞ〜コレは。

「貴様〜！ 止めるのです！」

「はいはい」

「べぶっ！ 落とせとは言っていないのです！」

「で、恋。コイツ誰？」

「……ちんきゅ」

ちんきゅ、ね。

まあ、もう友好的に握手なんて無理だろうけど。

「がるるるる〜」

……唸っているし。

「まあ、取り敢えず扱えるようになったな。行くぞ」

「え？」

仁はいつの間にか、馬に荷物を載せていた。

“行く” ってどこにだよ。

「『え？』ではない。旅を続けるぞ」

「あくそういうこと。もう行く？ あと少しダラダラしても……」

「貴様の旅だろうがっ！ 一泊の時間でも惜しいのだ。さっさと行くぞ」

「俺の準備も終わったぜ」

そうか。もう行くのか……。

「仕方ねえ。行くか！ 月、詠、霞、恋、珍。世話になった！」

「そんなに急ぐ旅ですか……」

「おお。じゃあな」